

「勝間川せせらぎ物語」～四万十市勝間川～

清流通信読者の皆様、こんにちは。今回は四万十川下流域、四万十市勝間川地区から、ふるりの景観を守るため、そして地域を活気づけるために奮闘する、勝間川地区：区長の宮川啓さんと、勝間川流域の“自然遺産”についてご紹介します。



↑勝間川区長：宮川啓さん



↑サクラツツジの案内看板



↑サクラツツジ(撮影：宮川啓)

清く澄んだ流れ、“勝間川”

四万十川の下流域。河口まで25kmほどのこのあたりまで来れば、川幅も徐々に広がって、人々が思い描く“四万十川らしさ”が随所に見られるようになってくる。

下流域で四万十川に注ぐいくつかの支流のうちの一つ『勝間川』は、2005年、旧中村市と旧西土佐村が合併して誕生した四万十市の真ん中あたり“旧境”に位置していて、一山越えた向こう側は旧西土佐村黒尊溪谷にあたる。

勝間川は、黒尊川ほど大きくはないが、清流という点では“勝るとも劣らず”の渓流で、川底で泳ぐ魚までくっきり見える透明な流れと、どこか懐かしい山里の景観が訪れる人々をやさしく迎えてくれる。

勝間川地区へのアクセスは、四万十川と勝間川合流点にある、河口から数えて4番目の沈下橋“勝間橋”（通称：鶉ノ江沈下橋）を渡って、川沿いのくねくね道を進んで行く。

しばらく行けば、山沿いにいくつかの人家が見えて、15戸人口40名ほどの小さな集落の入口に至る。

この勝間川地区の区長を務める宮川啓（ひらく）さん。宮川さんは、地域にある豊かな自然や知られざる景勝地をもっと多くの人々に知ってもらい訪れて欲しいと、登山道の整備や看板設置などに取り組んできた。

「6年程前のこと、人を案内して地元の山『ほけが森』（標高751m）へ登ったのです。この山は眺望も良く、登った方々も本当に感動してくださって、そのことをきっかけにトレッキング道を整備するようになりました。はじめは、見晴らしを良くするため少しだけ木を伐って整備するつもりだったのですが、そのうち『もう少しキレイにしたい』と欲が出て、結局、展望所をつくったり道の整備をしたり、看板や標識を設置したりといろいろするようになりましたね。」

時々には援軍もあるようだが、ほとんどの作業はほぼ1人で続けている。

「現在は、ほけが森周遊コース2～3時間くらいで廻れる短いものがありますが、もっと長いコース、本格的トレッキングコースも造りたいと考えています。また、足場の悪いところも多いので、連絡をもらったらコースガイドも引き受けています。」

サクラツツジ

春と言うにはまだ早く、時折、冷たい風が通り抜ける2月のはじめ。

私は宮川さんの案内で、『勝間川』とその源流域『ほけが森』の自然を訪ねた。

鶉ノ江沈下橋を渡って四万十川右岸に渡る。くねくね道を進んでいくと、車の前をぴょんぴょんと横切るものがある。鹿だ。

「この辺の山に多いのは、鹿・猪・猿ですね。昔は小さな熊もいたのですが、今はいません。かわりに増えたのは鹿と猿で、特に猿

には困っています。しかしどういものか、猿は四万十川右岸にしかいないようです。」

その道とずっと並行するように、澄み切った水をたたえる勝間川が続いていて、山と川の間には人々が大事に耕してきた棚田や畑が広がっている。

しばらく進むと右手前方に、美しい写真付き看板が見えてきた。

勝間川 桜 ツツジ の見どころ！

サクラツツジはツツジ科の常緑低木で、その花が桜のように見えることからこの名前がつけられたという。九州南部や南西諸島、台湾などの山地に自生するようだが、四国での分布は勝間川流域だけに限られていて、高知県では絶滅危惧 I A 類 (CR) = ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種に指定されている。かつてはこの地域にかなり広い分布域を持っていたらしいのだが、現在はここだけがその生育の場所で、サクラツツジの東限とされているようだ。

このサクラツツジ、絵にも描かれている。田中一村という日本画家がいるが、栃木県生まれのこの画家は、後に奄美大島に移り住み、1977年に亡くなるまで南国の植物や鳥たちを力強いタッチで描いたことで知られている。その彼の作品に『サクラツツジとオオタニワタリ』があるが、そこには、南国の濃密な空気の中に咲く生命力溢れる、かつ繊細な日本の花が描かれている。何年か前にその絵を見た時、私はこの花が四万十川流域にも自生することを知らなかったために、この花は『南の国に春を告げる鮮やかな花』のように勝手にイメージしていたのだが。しかし、今ここに、その自生する場所や常緑の枝を目の当たりにすれば、四万十川流域のトーンにじっくり馴染んでいるその淡い花色を、今は、はっきりと思い浮かべることができるのだ。

因みに、サクラツツジの開花期は南西諸島などでは1月～3月頃までのようだが、四万十川流域ではそれよりずっと遅れて、5月の連休頃ということだ。

「サクラツツジについては、今は地元の人達が皆で協力して保護活動をしています。この植物は生育環境が限られていて、時々盗掘して栽培しようとする人もいたのですがうまいかなかったようですね。以前ブームの時には、ごっそり盗掘する人もあったのですが、近年は、住民が団結して守るようになってからは、そういうことはありません。」

勝間川源流の男蛇淵・女蛇淵の滝

さて、そのサクラツツジの群生のある道をまだまだ奥へと進んでいく。

やがて勝間川沿いの道は、民家の途切れたところで未舗装にかわり、勝間林道に入っていく。林道脇の澄んだ水をたたえた溪流も、せせらぎの音がすぐ側に聞こえるように間近に迫り、まるで自分だけの“プライベートリバー”を思わせる。

この辺りまで来れば、未舗装の林道以外、人工物はどこにも見あたらない。

その先、勝間川源流地点には、男蛇淵(おんじゃぶち)・女蛇淵(めんじゃぶち)という二つの滝と淵がある。ここは遙か昔より清水が湧き続け山里の田畑を潤してきたというが、二つの淵はつながっていて蛇神様が行き来しているという伝説があり、3段になった男蛇淵の滝はその名の通りに雄壮で美しい。

「こんなところにこんなステキな滝があることは、誰も知らないでしょう。だから、もっと多くの人に見に来て欲しい」そう語る宮川さんは、滝まで降りる道に段を付け整備した。

「夏になったら、地元の小学生を連れてきてこの滝で水遊びをしたら、こども達はきっと大はしゃぎですよ。」

宮川さんが整備した道は、こども達の足でも安全に降りられるようにと、勾配を緩くし石と土とで築いた階段がつけられていた。

ほけが森

勝間川の源流は、国有林『ほけが森』に発する。四万十市と宿毛市の境に位置する751mの山頂からは、四万十市街や下田はもとより、晴れた日には遠く沖の島や豊後水道、四国山脈の山々がはっきりと確認できる。



サクラツツジ白 (撮影:宮川啓)



男蛇淵の20mの滝



ほけが森 751m

『ほけが森』の由来は諸説あるようだが、一つには“ほけ”という言葉が“断崖”を意味する古語と言われることから、もう一つは、山頂から少し下った所に“ほけ岩”という岩があって、寒い日にはこの岩から“ほけ”（湯気）がでることに由来しているという。

しかし、このほけ岩、この山に幾度となく登る宮川さんすら、実は、この“ほけ”を見たことがないらしい。「でも先日、寒い日に登った方は『見ましたよ』と言っていましたから、条件が整えば、“ほけ”が見られるようですよ。」

次に登る時は、私もそのほけ岩を見てみたいと思う。

『ほけが森』登山口はいくつかあるようだが、林道をひたすら車で走って、頂上に一番近いポイントから登るのが良いようだ。

その広場の一角には『ほけが森登山口』と書かれた標識があって、その脇には急な梯子がかかっている。その前で『えっ、これを登っていくの?』と、一瞬青ざめた私の表情に気が付いたのか、「急な上り坂はここだけです、安心して下さい」と、やさしく宮川さんが声をかけて下さった。

その言葉通りに、急勾配は入口だけで、その後は比較的緩やかな山道をひたすら登っていただけだ。宮川さんが整備した登山道の数カ所には標識が付けられていて、トレッキングに慣れない初心者の私などでも、比較的楽に登れるように整備されている。

道の脇には大小の自然林が茂っているが、特に多いのは樹齢100年以上と思われるアカガシの大木で、至る所に見られ、それも、何十年か前の大きな台風でなぎ倒されたという大木が、ゴロゴロ根こそぎ横倒しになっていながらも、天に向かってその枝を大きく広げている。何という生命力！ その様を見るだけで、自然の力の雄々しさに感じ入ってしまう。

こうして、宮川さんが整備してくれた、なだらかな坂道を登ること40分。

いきなり視界が開けた。

「先日は、地元の中学生在が遠足でやってきたのですが、頂上にたどり着いた時には絶叫していましたよ。」

その気持ちはよくわかる。まさに絶叫したくなるような絶景だ。

宮川さんがつくってくれた4箇所の展望所からは、大月町・豊後水道方面、四万十市街・下田方面、四国山脈方面には四万十川源流の山、不入山もはっきりと見えている。黒尊溪谷を間近で見られる展望所からは石鎚山も見えていて、そこには、まだつぼみの堅いシャクナゲの群生地が広がっている。

そして、宮川さんが指さす方向には、西土佐中半の道路を走る車が小さく見えている。

「あれが四万十川です。私は川の側のあの道を通る度に、ほけが森を見上げて今いるこの地点を探すのですが、上からはあの地点を容易に特定できるのに、不思議なことに、下から見上げてもこの地点が特定できないのです。」

そうか、そういうものなのか。『俯瞰する』ということは、そういうことなのだろう。

高いところから景色を眺めることは、自分の周りの世界を確かめるようなところがある。

だからここに辿り着いたら、日常の些末なことがどうでもよくなって、物事を客観的に見られるような気がするのだろう。

山に魅せられた人の気持ちが、少しながらわかったような、そんな気がした。



ところで、イラストマップ『勝間川せせらぎ物語』（別紙：PDF参照）によれば、山頂、勝間の三角点の別名が『天使の三角点』とある。

なぜ、そういう名前がついたのか謎だったのだが、登頂してみて納得した。

勝間三角点標識の上には、本当に、天使の像が鎮座している。

誰が置いていったのか、そんなことはどうでも良かった。なぜか心が温められた。

その天使像は、勝間の三角点にずっと昔からあったように、

そんな様子で、そこに置かれていた。

(取材/記事: 矢野由美子)



山頂から、四万十川が見える



天使の三角点